

## 「自己欺瞞」の哲学を考える

太田雅子 (Masako OTA)

自己欺瞞という語を文字通りに解すれば「自分を騙す」ということである。他人を騙すならともかくなぜ自分を欺くという現象が生じるのか、自己欺瞞は他人への騙しのアナロジーであるのか、そもそも自己欺瞞とはいったい何であるのかなどの論点をめぐって様々な哲学的議論が行われてきたばかりでなく、社会心理学や進化心理学においても大きな関心が寄せられている。本発表では、主に分析哲学における自己欺瞞の議論の変遷をそこで提起された問題点とともに振り返りながら、議論の焦点が、信念  $p$  と信念  $\neg p$  の関係という一階のレベルからそれらの信念の扱い方に関する二階のレベルに移っていることを確認する。

分析哲学における自己欺瞞の考察で注目を集めた論考の嚆矢はラファエル・デモスの“Lying to Oneself” であると言われる。タイトルの通り、自己欺瞞は、他人に嘘をつくと同じようなしかたで「自分に嘘をつくこと」と捉えられていた。その上で分析面において主要な役割を占めていたのは「騙される信念  $p$  と騙す信念  $\neg p$  が共存している」というモデルである。以来、自己欺瞞の問題は、そこで  $p$  と  $\neg p$  が共存しているのか否かを中心に、ソレンセン、ケント・バツハラによって議論が進められてきた。なぜこの点が主要な論点になったかという、2つの相反する信念が共存することになれば、素朴心理学で自明のものとしてきたひとの信念の合理性が疑問視されるからである。さらに、このモデルをめぐっては、伝統主義者とデフレ主義者という2つの大きな流れが形成されることになった。伝統主義者は自己欺瞞における信念  $p$  と  $\neg p$  の共存を認め、自己欺瞞自体が意図的行為だとするのに対し、デフレ主義者は自己欺瞞で生じているのは本来信じるべきことを信じずにそれを裏付ける証拠を捻じ曲げて偽である信念をもつということ以上でも以下でもなく、そのさいに棄却された信念の存在も意図も必要ではないと主張する。伝統主義者の代表が心の分割を導入したデイヴィドソンであり、デフレ主義の主な論客はアルフレッド・メレである。

2000 年前後になってからは、ファンクハウザーやスコット＝カクルズらによって「なぜ／どのようにして  $p$  から  $\neg p$  への信念の歪曲が生じるか」という側面が主に注目されている。ファンクハウザーは「自己欺瞞とは、自分が信じたいと思っていることを信じていると思っているが実は信じていない状態である」と述べており、ニール・レヴィは自己欺瞞者がある種のコントロールを失っているという点を指摘し、責任帰属の可能性を疑問視する。

そしてスコット＝カクルズは基本的にはデフレ主義に立ちつつも、信念を巧妙に歪曲する自己欺瞞者の計画性には伝統主義者が主張していた意図の介在が見られることを指摘し、かつての伝統主義 対 デフレ主義の折衷案を提示している。

本発表ではスコット＝カクルズの 2002 年の論文を手がかりに考察を進めるが、その際に生じる問題点にどう答えるべきかの指針を示し、また社会心理学や進化心理学のアプローチとの比較に基づいて、自己欺瞞の哲学的分析の意義について何らかの提言を行いたいと思う。